
ボールパーク

三矢光司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボールパーク

【Zコード】

N6466A

【作者名】

三矢光司

【あらすじ】

新聞社のアルバイトと新入社員として出会った修平と優香。優香に魅かれる修平。修平の趣味の野球観戦が優香の過去に関係して…。

出会い

新聞社でのアルバイトを定時の午後4時で終えた修平は、地下鉄で水道橋に向かつていた。帰宅ラッシュにはまだ早いこの時間だが、車内は学校帰りの中高生や大学生、買い物帰りの主婦、毎日が休日といった感じの老夫婦などで混雑していた。スーツ姿も見掛けるが、それは決して家路に就いているのではなく、出先から帰社していたり、次の営業先に向かつていたり、まだ勤務中といった風情だった。既に「拘束」から解放された修平はそんなスーツ姿にちょっとした引け目を感じた。

進行方向右側の窓の多くには日よけのためのブラインドが下ろされている。地下を走っているのに、日よけもないだろうとふと思つたが、地上を走る私鉄から乗り入れていることを思い出し、納得した。ほとんどの乗客は無意識に下ろされているブラインドには関心がないようだつたが、この地下鉄はまた別の私鉄に乗り入れていくため、その時にはまた下りているブラインドが役目を果たす。いや、次に地上に出る時に太陽が顔を見せるのは左側じゃないか…？ どちらにしろ、修平はその前に降りてしまう。

「僕には関係ないか」

そんなどうでもないことを考えているうちに、また一人の名前が浮かんだ。顔がしっかりと浮かばないのは、まだ会つて1カ月だから。その上、そのうち会つたのは4日だけだ。思い出そうとも思い出せないのが、もどかしく悔しい。街で会えれば、彼女だと気が付くことはできるだろうが、今、その顔を浮かび上がらせることはできない。

「次はいつ会えるんだか」

彼女に会つたのは4月11日だつた。アルバイト先に新入社員として、新人研修を終えた彼女が、修平がいる社会部に入つてきた。

正確には前日の夕方、配属されたきただが、修平は既に退社していた。

その日の朝、早番の修平がまだ誰もいない社会部に行くと、ホワイトボードに3人の名前があった。

『新人 佐藤拓也 飯尾翔 江添優香』

一人は女の子か…。可愛い子かな？ そんなことが頭をよぎったが、すぐに消し去った。例え、好みのタイプだったとして、そこから発展する可能性は限りなくゼロに近い。今までの新人のように付かず離れず、関わればいい。

「おはようございます」

その声に修平が顔を上げると、初々しい姿で、笑顔の女性が立っていた。エゾエユウカさんだ… そう思つて見つめていると、「はじめまして。新人の江添です。よろしくお願ひします」

「アルバイトの高木です。よろしくお願ひします」

「タカ…？」

「高、木…で、す」

新人記者は、それぞれの部署に配属されると、まず1週間から10日ほど編集補助の仕事 つまり、修平らアルバイトがやっている仕事をする。毎年、新人に教えるように、修平は仕事の内容を教えていった。隣のデスクに座つた彼女の横顔はとても美しく、修平はちらちらと見遣つた。肩まで伸びる茶色く染まつたストレートの髪はキラキラ輝いていたし、耳に光る銀色のピアスもまさに彼女のために作られたように調和していた。そんな気がした。

「あのー、これは…」

作業の手順を尋ねる、彼女の丸くて大きな瞳には吸い込まれそうだった。

「ああ、なんだ」

納得して呟く、その口には薄い色の口紅が塗られていた。

「なんか違いますっけ？」

修平の視線に気付いた優香が聞く。

「いやいや、合ってる、合ってる。大丈夫です」。

動搖を何とか隠した。「あなたに見とれてました」なんて言える訳がない。もし言つたら、どういう反応をするのだろう。喜んでくれる？ 困惑する？ 迷惑する？

結局、新人の社会部での編集補助の仕事は4日で終わってしまい、優香ら3人の新人はそれぞれ記者クラブへ配属された。修平が優香と会うことなくなってしまった。

出合い（後書き）

人生で初めて書いた小説（じきもの）です。率直な感想、厳しい意見などを聞かせていただけたら幸いです。

修平が水道橋駅のホームに降り立つた時には時計の針は午後4時半を少しすぎたところだった。あと1時間半もすると東京ドームではジャイアンツ対カープの試合が行われるといつのに、ホームの混雑はそれに見合つたものとは思えなかつた。確かに平日といつこともあるのだろうが。

一昔前の東京ドームのジャイアンツ戦のチケットは、「プラチナチケット」の代名詞だつた。発売日には長蛇の列ができ、即日完売が当たり前だつた。金券ショップでは定価の数倍の値段が付いていた。

そのジャイアンツ人気の凋落がこの数年著しい。テレビ視聴率の低下が叫ばれ、かつて野球に興味を持たない人の野球に対する最大の反感要因だつた「放送時間の延長」も60分が30分になり、今年はついに15分が主流となつていた。修平は既に前売券を買つていたが、チケットは一部の券種を除いて売れ残つており、当日券販売の案内がしきりに流れていた。

修平が手にしたチケット 指定席C1塁側21列231番 の座席に腰を下ろしたのはまさに午後5時になる時だつた。ドーム内で食料を調達するのは高くつくるので駅前のコンビニで買った、ミニ俵むすびセットと500ミリリットルの紙パック入りの紅茶を口にしながら、グラウンドを見つめていた。

午後5時半、両チームのバッテリーが発表された。「ジャイアンツのピッチャーは：広瀬」。その場内アナウンスにライトスタンドを中心に戦声が沸き起つた。修平の顔も綻んだ。セ・リーグはパ・リーグと違い、予告先発ではない。ひょつとしたら今日は投げないのでないかという不安もかすかにあつたが、そのアナウンスを聞いてほつとした。なんと言つても修平は、広瀬の今シーズン初登板の日を狙つて東京ドームに来たのだった。浮かんでは消え、消えて

は浮かんでいた、彼女の顔や声やしぐさがこれから数時間に限つては、なくなつてしまいそうだった。

午後6時1分、プレー ボール。カープの1番バッター、尾上がバッターボックスに立つ。1番とはいえ、かつては4番を任せていた、長打力がある選手だ。広瀬が1回りも年下のキャッチャー、篠原のサインに頷く。修平は息をのんで、ピッチャーマウンド上の勇姿を見ている。大きく振りかぶった広瀬は美しいフォームで、渾身の力で、投げた。ストレート。パサツ。篠原のミットにボールが収まつた。「ストライク！」ライトスタンドを中心に歓声が挙がり、拍手が起きた。スコアボードには、136km/hの表示。平凡な数字だった。

*

気圧差による突風に背中を押されて東京ドームを出た修平は、水道橋駅へと向かう人の波に乗っていた。

「なんであのボールが打てねえんだよ。あんな遅いボール、俺だって打てるよ」

「いや、お前じゃ打てねえから。でも今日は勝てると思ったのにな。広瀬だぜ」

胸に「CARP」の文字が入ったレプリカ・ユニフォームを着た男達の声が響いてくる。修平はとつと、実に満足気な表情で足取りも軽く駅へと向かった。

「今日はもう帰つていいよ」

キャップからそう言われたのはまだ午後9時前だった。電車の時間があるうちに帰れることの方が少ない優香にとつては珍しく早い帰宅だった。無我夢中でやつてきた4月は早朝から深夜、時には未明まで働いていても、疲れは感じなかつた、というよりも疲れを感じる余裕もなかつた。しかし、ゴールデンウイークが明け、仕事にも少しずつ慣れてきたこのごろは肉体的にも精神的にも疲れを感じるようになつてきた。明らかに睡眠不足。学生時代と比べて睡眠時間は格段に減つていた。

肌も荒れちゃうよ。希望通りの仕事に就けたんだけどな。

優香が乗つた地下鉄の車内は思いのほか、空いていた。たまたまなのか、いつもなのか、普段この時間帯に乗らない優香には分からぬが、とにかく座ることができたのは良かつた。

せつかく座れたんだから、寝ちゃおづ。そう思つて、目を閉じた。地下鉄が刻む一定のリズムに紛れて、車内の話し声が耳に入つくる。

ジャイアンツ、どうなつてんだよ？

ああ、勝つてますよ。

よーし、良かったな。嬉しいだろ。

いや、俺、別にファンじゃないですから。ていうか、野球興味ないですし。

何言つてんだよ。野球、嫌いな奴なんているのか？
俺、サッカーの方が好きですから。

大歓声が聞こえる。暑い。陽射しが眩しい。皆、中心を見つめている。中心が何なのかは分からない。けれど、そこに目が釘付けに

なる。全ての視線がそこに注がれる。それはものすごい輝きを放っている。手を伸ばすが届かない。

突然、暗闇になる。寒い。何も見えない。何もない。ここは何処？

じゃあ、今度球場に連れてってやる。野球の素晴らしさを一から教えてやるよ。

まあ、一度くらい行つてみても良いですけどね。

車内は何も変わつていなかつた。目の前の酔っ払いはまだ野球の話をしている。優香の右手は右の太ももを押さえていた。

まだ。よく見る夢。とはいゝ、前回見たのがいつだつたか覚えていない。ただ、何度も見た気がする。何か息苦しさを感じて立ち上がり、程なくして停まつた駅でホームに降りた。

ちょっと休憩。優香は改札口を出て、地上に出てみることにした。夢…いや、ただの夢とは思えない。何だらう。やっぱりあの時の…。

地上に出てみると、多くの人で混雑していた。午後9時半をすぎたところだつた。

そつか…。

すぐ目の前の東京ドームで行われていた野球の試合が終わつたらしい。そもそも優香は今日東京ドームで試合があることすら知らなかつたのだが。

帰ろうつと。

再び、改札口へ降りる階段に向かおうとした時、一瞬、知つてゐる顔が見えた気がした。

あれつ？

人込みの中、オレンジ色のメガホンを振り回す子供を避けながら

追い抜き、背後からその息子をたしなめる父親の声が聞こえた時、修平の目は一点を見つめていた。

あっ、江添さん？ なんでこんな所に。

修平は彼女に自分の存在を認識させようと、赤いユニフォームを搔き分け、足下の子供を蹴つてしまわないよう注意し、オレンジのメガホンを避け切れず肩にパシーンという衝撃を受けながら、進んだ。

修平が見つめる、彼女の表情が変わる。その距離は5メートルほどになっていた。その間には、カップルに赤ら顔のサラリーマン、はしゃぐ子供、肩を落としている赤い帽子、突然人の波にさらわれ困惑している中年女性二人組がいたのだが。

「高木さん」

「江添さん」

二人の声が重なった。

「どうしたんですか？」こんな所で、偶然ですね」

優香が声を発するのが、一瞬早かった。

「いや、野球見てたんだけど。江添さんは…今、帰り？」

「はい」

その場に立ち尽くしている一人を迷惑そうに通り過ぎていいく。それに気付いて、とりあえず人の流れに乗った。

「ここで…誰かと待ち合わせとか？」

「いえ、もう帰るところなんですけど。途中でちょっと寄り道？ みたいな」

「よかつたらご飯でも一緒に食べていかない？ 時間あるなら、だ

けど

「あっ、はい。わたしあ腹空ってるんですよ

修平と優香は案内された、一番奥のテーブル席に座った。
「ビールで」

「あ、私も

「じゃあ、ビール。生中を2つ」

「はい、かしこまりました。野球の帰りですか」

30歳はどうに過ぎていいのであるつ、いかにもお調子者といった感じの男性店員が聞いてくる。

「あ、ええ」

気のない返事の修平に、店員はそれ以上深入りせず、ぐるりと向きを変えた。

「野球、どっちが勝ったんですか?」

優香の発したその声に、店員が一瞬不思議そうに振り返ったが、すぐに厨房の方へ消えていった。

「ジャイアンツ、勝ちましたよ。広瀬が久しぶりの勝利。去年は勝つていなからな。何日ぶりになるんだろう。うん、8対3でね。良い試合だったな。完勝ってやつ

「そなんだ、良かつたですね」

「ああ、野球とかって分かる?」

「うん、それなりには分かりますよ。12球団全部言えますよ、うん。インフィールドフライってどうこうの、なんて聞かれると分かんないですけどね」

悪戯っぽく微笑む優香に、ドキッとながら修平は

「インフィールドフライなんて言葉が出てくるなんて思わなかつたよ。出てくるだけす」
「はい、お待

さつきのお調子者が生ビールと付け出しのひじきと大豆の煮物を持つてきた。

ここまで野球の話をしてるんだ。自分で自分に突っ込みながら、修平は自分の頭をフル回転させようとしていた。仕事の話。学生時代の話。子供の頃の話。今日の夕刊の一面は……思い出せない。彼女のこと�이다. 이들이 알고 싶어하는 것은 아내가 그토록 예전에 드러낸 그의 사랑 때문인가? 아니면 그의 아내가 그의 그림에 대한 관심 때문인가?

のか。カレシはいますか。明日は早いの？ 好きな音楽。話題のドラマ。本日オススメの一品。久保田。芋焼酎。エビスピール。枝豆。貸切予約の「」案内。右に左に店内をキヨロキヨロしながら話題を探す。

女性と話すのに緊張する歳でもない。ただ、彼女にだけは最初から意識して緊張してしまった。意識しないように、普通に振舞おうとすればするほど、無意識に、緊張してしまい、意識してしまう。彼女も何を見るでもなく、店内の壁に、細長く丸めて置かれたおしゃりに、斜め向かいの中年サラリーマンらしき3人組に視線を泳がせている。

チャンスだ。約1ヶ月顔を合わせることがなかつた彼女が目の前にいる。一緒に飲んでいる。偶然とはいえ。ランナーを出すこともできず、0対0の膠着状態が続いていた中で、ラッキーが重なり、スコアリングポジションにランナーを置いたんだ。

行き場をなくした修平の視線が元の位置に戻つたと同時に、優香の視線も帰つてきた。大きくて丸いその瞳に釘付けになつた。

修平は聞いてみた。

「江添さんつてどこの大学を出たんですか」

「東大です」

「お弁当温めますか いいです」

そんなコンビニのレジでのやりとりのようだが、優香が間髪を入れず答えた。

「東大つて、トウキヨウダイガク？」

「そうですよ。東京大学です。海の灯台じゃないですよ」

わざわざ「トウキヨウダイガク」と聞き返してしまつた修平と、それに対して「灯台じゃない」なんてベタな返しをしてしまつた優香は、思わず照れ笑いというか、苦笑いというか、何とも言えない笑みを浮かべた。

「東大。東大つてすごいよね。頭良いんだ」

「親が国立じゃなきや駄目だつて。私立は駄目だつて。わたし、家、東京だし」

「で、東大か。かなわないな。何学部なんですか」

「法学部です」

「弁護士とか目指してたり?」

「ううん、ずっと新聞記者になりたかったんですよ」

「そりなんですか」

「はい、ああ、社会部が第一希望」

二人の今の関係を表すかのように、敬語とタメ口が混在した会話が続いた。

「なんで新聞記者になりたかったんですか? 何かきっかけがあつた?」

一瞬の間が空いた。

「さつきからわたしのことばっかり話してません? なんか自分のことばっかり話してすみません」

かすかに頬を赤らめてきた優香が言ったその台詞には、その質問には答えられないという意思表示があつたような気がした。

過去

居酒屋を出た時、時計の針は午後10時30分を指していた。まだ終電には1時間半ほどある。

「ちょっとコーヒーでも飲んで休んでいく？」この時間でもやつてるとこあるかな」

「あっ、あれでいいよ」

優香が指差した先には、自動販売機があつた。

「缶ジュースでいいの？ まつ、いいか」

修平は販売機に120円を入れた。

「はい、押していいよ」

「おひつてくれるのー？」ありがとー」

近くの小さな公園のベンチに腰掛けた。ホットレモンティーを一口飲み、その缶を両手で、大事な宝物のように胸の前で持っている。優香の横顔を見ながら、修平はコーンポタージュのコーンが缶の底に残らないように、しきりに手で振っていた。ブラックコーヒーのボタンを押そうとしたまさにその時、横から出てきた細い人差し指にコーンポタージュを押されたのだった。

「実は俺、コーンポタージュ大好き。コーヒーの方がカツコいいかなと思って、ブラックコーヒーを飲もうとしたけど」

最初は信じていなかつた優香も、修平が満足気にコーンと黄色いスープを口に運ぶのを見て、悔しがつていた。

「ねえ…」

優香の手の中の缶から、その温かさを感じなくなり、修平が缶の底に残つたコーンを覗き込みながら、食べるのをあきらめよつとした時、唐突に優香が口を開いた。

「教えてあげよっか」

「ん？」

「なんで記者になりたかったか」「ああ」

「1988年8月20日」「えつ?」

「私は5歳でした。高木さんは10歳?」

「うん。誕生日来てないから正確には9歳かな」「で、広瀬選手は17歳。高校3年生」

「なんで広瀬?」

「覚えてます? 甲子園の決勝。凄かつたんですよ。彼。ホームラン打つて、投げて」

「4対0だつたんだつけ? 満塁ホームランに完封。独り舞台だつたな。それを見たのがきっかけなの?」

「あの日、私は父と甲子園に行つてました。私の父、野球が好きだったんです。特に広瀬選手のファンで。それで、朝、新幹線に乗つて甲子園に行つたんです。私を連れてね。私は5歳だから、野球なんて興味なかつたんですけど、ちょっとした旅行が楽しかつた。新幹線から見えた富士山とか。それで、甲子園に着いてもそんなに野球を見るわけでもなくて。カチワリつて言つんですね? 氷。あれを喜んで食べてたんじやなかつたかな」

「へー、そなんだ」

優香の話の結末は全く想像できなかつた。

「その時に、野球の取材、スポーツ記者にあこがれた訳じやないよね」

否定されるのを予想しながら、修平は聞く。

「うん、それは違います。その日、もつ一つ大きいニュースがあつたんですけど、覚えてないですよね」

修平は、その日何があつたか、思い出そうと試みようとした。が、そんなことはするまでもなく、すぐに脳裏に浮かんだ。あの、悲惨な光景が。翌朝、家に届いた朝刊の大きな見出しが。それは9歳の

修平にも十分理解でき、驚き、震え上がるような文字だった。

『列車脱線49人死亡 大阪……線 甲子園帰りの乗客多数』

「列車……事故……だよね……」

優香は、ちょうど甲子園に行つていたから覚えているのだろうか？まさか知り合いが乗つっていた？修平の体に緊張が走った。ブワー。車のクラクションが聞こえた。大学生らしき集団の叫び声が聞こえる。サークルの飲み会だろうか。目の前を千鳥足で歩く酔っ払ったサラリーマンと目が合う。サラリーマンはすぐに立ち去る。ちょっとと離れたベンチではスース姿のカップルが人目をはばからず、自分たちの世界に入つている。

気付くと、優香が目の前に立つていた。

「ん？ 何？」

平静を装つて発した修平の言葉が置き去りにされたまま、優香は自分のスカートをたくし上げていった。

「ちょっと何してんの。江添さん？」

マスクマンのレスラーが、突然、自分のマスクを脱ぎだした時の解説者のように、修平は慌てた。

あと数センチで下着が見えてしまうところでスカートの動きは止まつた。修平の目は露になつた優香の太ももで一瞬止まり、それから必死に上へ向かつた。彼女の顔はとても冷静なようにも見えたし、悲しそうにも見えた。酔っ払つた状態にも見えたし、すっかり酔いを覚ましたようにも見えた。

「あの時の。事故の時の。その時の怪我」

優香の右の太ももには20センチ以上はありそうな傷が走つていた。

「ジコノケガ？」

「うん、事故の時の怪我」

再びベンチに座りながら優香が言う。

「その列車事故……その88年の列車事故。その列車に乗つてたの？」

江添さん

修平はかなり動搖していた。話が重すぎる。ていうか、この状況で話す話なの？この場所で。ていうか僕が聞いていい話なのか？何で僕に話してるんだよ？

「江添さん、酔ってる？もつ帰る？」

「大丈夫ですよ」

「…そう」

「あの日、甲子園を出て新大阪に向かつてたんですよ。で、その列車…事故を起こした列車に乗つたんです」

「うん」

「もうあんまり覚えてないんですけどね。凄い衝撃があつて、氣付いたら病院で」

「そつか」

「その時に父は亡くなりました」

「そつか」

「さつきから『うん』とか『そつか』ばっかり」

「そつか…いや。『メン、何か気の利いたこと言えって感じだよね』

修平は、自分の気の利かなさに、自分で嫌気が差していた。

「ううん、かわいそう、とか辛かったね、とか聞き飽きてるから。そうやつて黙つて聞いてくれるのが安心する」

修平の左に座っている優香が右に向き直して、修平の顔を上田使いで覗き込むように見る。

優香の瞳に見とれてしまふのを避けるよう、やや目線を外しながら聞く。

「いや、それが記者になりたかった理由？」

「きつかけかな。それが元々のきつかけで。それからまたいろいろあるんですけどね。あつ、そろそろ帰りましょうよ」

告白の真意

列車事故か…。修平は心の中で呟く。右腕にしている電波時計は
<23:58 54、55、56、57…>と進んでいた。もつすべく今日が終わる。長かった今日が。

会社で優香から記者クラブに到着したとの連絡を受けたのが、随分昔のことのように感じる。

「おはようございます。江添です。出ました」

受話器に向ひつの優香の声はいつにも増して元気なような気がした。

なんか今日元気だな。そう思いながら、出勤簿の優香の出勤時間の欄に「7時40分」と書き込んだ。

東京ドームに行つた。広瀬が勝つた。今日の一番の思い出になるはずだった。帰宅して、今頃、缶ビールを飲みながらスポーツニュースをザッピングしているはずだった。

それが…。

広瀬の勝利はすっかり片隅に迫りやられてしまった。優香の告白に。彼女の告白が修平の頭の中、心の中の大部分を占めてしまっていた。彼女の告白は衝撃的だった。正確に言つて、告白の内容 列車事故に遭遇したという彼女の過去の事実 よりも、その過去を優香が自分に話したという現在の事実に驚いていた。

そんなに酔つてたかなあ。優香の顔を思い出してみる。一見、大人しそうな彼女のテンションが高くなっていたような気がする。けれど、明日の朝、今夜の記憶がないということはないはずだ。

優香の告白の真意を測りかねているうちに、列車は下車する駅に到着した。

*

“うううだらう。優香は、自分の告白に自分で困惑っていた。
何で高木さんにしゃべつちやつたんだろう。

列車事故のことは今までほとんど話したことがない。その過去を知っているのは「く親しい友人だけだ。それが今日、修平に話してしまった。酔つてたのかな。

確かに、テンションは高くなっていた。修平と居酒屋で話していた時は楽しかった。けれど、どんなに酔つていたとしても、その勢いで告白しちまつといふことはなかつた。どうじつ…。

携帯電話の着信音が鳴つた。優香がベッドから起き上がり、携帯に手を伸ばそうとした時、音は止まつた。

幼馴染みの浩子からのメールだつた。幼馴染みといつても、今でも頻繁に連絡を取つてゐる。

「まだ起きてる? 今日まーくん出張で、暇なの。優香は最近どう?」

だつたら、まーくんにメールしなよ。そう思いながら携帯を枕の横に置いてからベッドに飛び込んだ。

はあ。しばらく考えてから携帯を取る。浩子の番号を確認してから発信してみる。

もしもし? 優香まだ起きてたんだ。何?

「うん、何つてそつちがメールしてきたんじやない?」

ああ、そつだけど、あんたが電話してくるの珍しいからさ。メールばっかじやん。

「うん、どうしてるかな、と思つて」

変わんないよ、専業主婦は。優香はどうなの? 仕事、忙しいん

でしょ？ なんてつたつて新聞記者だもんね。美人記者。

「うん」

つて、否定しなよ。

「…

ねえ、なんかあつた？ ていつかあつたでしょ。分かるよ、私は。

「事故のこと…」

ああ…

浩子は事故のことを知っている。事故の前からの友達だった。優香は今日の修平とのことを全て話した。

それは、恋でーす。恋だね。そのタカダさん？が好きなんだよ。
「え？ 違うよ。だつてほとんど会つたことないんだよ。ねえ。別にそんなことないって」

ちょっとそんなに動搖しないでよ。分かりやすいなあ。

「だから違うって」

うん。まあ、優香がタカダさんを好きなのかどうかはまだ分かんないけど、話したことは後悔することじゃないよ。優香は酔った勢いで軽々しくしゃべるような口じゃないんだから。聞いてほしいっていう思いがあつたんだよ。

「うん、ありがと。ちょっと気持け、楽になつた。ねえ、タカダじやなくて高木だよ。高木修平さんつていうの」
ハハッ、「めんね。タカギシコウヘイさんね。そうそう、あんた見かけによらずお酒強いからね。簡単には酔わないよね。
「何それ」

恋、か。携帯の画面には1：00の文字が。また今日が始まる。

修平がいつものように出社して社会部のテレビをつけると、満面の笑みでヒーローインタビューに答えている広瀬の顔が現れた。そろそろ優香から出勤したとの連絡が入るはずだ。昨日の今日、今日の昨日。どういった対応を取ればいいのか。昨日はどうも。やっぱり事故のことには触れない方がいいよな。気にしているだらうしな。また飲みに行こうよ。今度は遊園地でも…何、デートに誘つてんだ。

結局、彼女のことを考えているんじゃなくて、僕が彼女に好かれることを考えている。彼女のためじゃなくて自分のため。ふう、一つ大きなため息をついた時、デスクの電話が鳴った。

軽く咳をして、受話器を上げた。

「はい、社会部です」

「いえ、違いますが。はい」

朝っぱらから間違い電話かよ。その後、何本か取った電話に、優香からのものはなかつた。

今日も早番は高木さんかな。昨日のこと、覚えてるよなあ。優香はいつもの朝よりも緊張しながら携帯電話を開き、リダイヤルの履歴の中から、「社会部」の表示を選択して、発信を押した。他の人が出してくれたら、いいけどな。そうしたら何の問題もない。でも、彼の声が聞きたい気もする。どうしてだらう。

「はい、社会部です。

「あ、江添です。あ、おはようございます。今、出ました」

「ああ、はい、了解です。

「お願いします」

「あ、もしもし」

「はい？」

トゥルルル…。別の電話が鳴る。間が悪いことに、他に誰もいない。恨めしそうに、鳴り続ける電話に視線を送りながら、修平は「いえ、了解です」と、優香との会話を諦めた。

「はい…」

優香も何か引っ掛けたりながら、電話を切った。

ああ、もう。割り込んできた電話の受話器を置いた修平は、椅子に体を預けて、天井を見上げた。何で、何も言わないんだよ。つくづく自分が嫌になつた。

高木さん、昨日のこと、何も言わなかつたな。あんなことしゃべっちゃつたの、私だし、私から一言言わなきやいけなかつたかな。優香は、昨日のことに何も触れなかつた修平の気持ちが気になつていた。気を遣つてくれたのかな、それとも、私の話なんてすっかり忘れてるのかな。

「江添、ちょっといい？」

先輩に呼ばれた。優香は気持ちを切り替えて、今日の仕事に向かつた。

その日からは、何の変哲もない、また元の日々に戻つた。修平と優香の接点は、仕事上の電話だけになつた。それは1日数回だったり、数日間、声を聞くことがなかつたりだったが、修平は電話に出る度に、受話器から聞こえる声が優香であることを願つた。優香は、修平が電話に出ることを期待しているような気がしていた。

朝刊の「あすからの天気」に日をやると、雲と傘が順番に並んでいて、そこに太陽に入る余地はなさそうだった。優香は新聞から顔

*

を上げて、目の前に日めぐりの「フ」を見てから、今度は「きょうの天気」を左からたどつた。雲、太陽、雲、雲、傘、傘。

「駄目っぽいな」

窓からかすかに差し込んでくる光を浴びながら、呟いた。

「ん？ 何が駄目なんだ？」

横に座っていたキャップが聞く。

「今日、七夕ですよね。天の川、見えそうにならないなと思って」「七夕か。うちの娘が幼稚園で短冊に願いごと書いたって言つてたな。何を書いたか教えてくれないんだけどな。江添も書いたりするの？」

「書かないですよ。私、もう23ですよ」

「いや、俺から見たら娘と変わらない…なんてことはないか。でも、願いごとぐらいあるんだろ。ちょっとタバコ吸つてくるな」

「願いごと、か。忘れて、吹つ切つて、幸せになりたい。」

朝刊をめくつていると、「高校野球地方大会 6日」という小さな記録だけの記事が目に入った。

今年も暑い夏はすぐそこまで来ていた。

修平がアパートのドアを開けると、灰色の空が広がつていた。駅までの15分の間に雨が降つてくるといふことはなさそうだったのでも、傘を持つしていくのはやめようかとも思つたが、「夜には雨が降つてきます。折畳みの傘を持つてお出かけください」というお天気お姉さんの笑顔を思い出して、折畳み傘を取りに部屋に戻つた。電車の時間が迫つてゐる。やつべえ。傘を手にするとすぐに鍵を掛け、階段を降りていつた。

走つた上に、途中「こと」とく青信号が続いたため、ホームには電車の時間の2分前には着きそうだつた。ほつとして歩き出すと、駅構内に大きな笹が飾られているのが目に入った。五色の短冊がぶら下がつてゐる。「家族みんなが健康で過ごせますように」という文字が見える。今日は七夕か。天の川、見えそうにないな。願いごと、

か。彼女ができますように。できれば江添優香さんで。
ばつかみたい。自分の想像に突っ込みながら階段を下りようとす
ると、到着した電車から降りてきた乗客がいっせいに上がってくる。
修平は慌てて階段の左端を駆け降りた。

約束

朝刊のスポーツ面の「高校野球地方大会」の記事の面積は、日に大きくなり、1面のうち下半分を占めるまでになつていった。修平の地元でも開幕していたが、母校の名前は残念ながら数字の下にあつた。県大会の開幕試合でコールド負けし、短い夏を終えていたのだ。野球部に所属していたわけではなく、また甲子園に出場するような強豪高というわけでもなかつたので、特にがっかりもせずにいつものように家を出た。

その日、キオスクの前を通り過ぎよつとした時、修平は高く積み上げられたスポーツ新聞の見出しに目を奪われた。その瞬間、小銭入れから100円玉1枚に10円玉2枚、5円玉2枚を取り出して、その高く積みあがつた新聞の“塔”から1部を取つて店員の中年女性の前に差し出し、130円を渡した。

急いでホームに向かいながら、一面の記事を読み進める。途中、左から歩いてきたサラリーマンの進路をふさぐ形になり、舌打ちされたが、全く気付かなかつた。

『ジャイアンツ・広瀬引退か?』

それがこのスポーツ新聞の一面の見出しだった。修平がキオスクで見た時には「広瀬引退」の4文字が大きく、「か?」は小さな文字で、しかも折り曲げられた内側で見えなかつた。常とう手段と分かつていたが、広瀬のこととなるとまんまと引っ掛かつてしまつた。記事の内容はこうだ。

「広瀬の今季の成績はここまで1勝4敗。現在は二軍で調整しているが、7月30日の甲子園でのタイガース戦での先発登板が予定されている。関係者の話として、広瀬はこの試合に選手生命を懸ける、つまり結果を出すことができなければ引退を決意する」

7月30日午後2時プレイボールのタイガース対ジャイアンツ1

4回戦は、全国高校野球選手権大会前に行われる、最後の甲子園球場でのプロ野球だった。この試合の後、タイガースはいわゆる“死のロード”に突入する。

甲子園のスターだった広瀬はあえてこの試合を選んだのか。それとも監督の意向なのか。夏の甲子園に広瀬が帰つてくる。それは広瀬にとって最後の夏の甲子園になるかもしれないなかつた。

修平は、その日甲子園に行くことを決めた。

*

夜の9時半。30分ほど前まで殺到していた原稿もぴたりとやみ、社会部は静けさを取り戻していた。修平はといふと、残り30分となつた勤務時間を持て余していた。腹減つたな。頭の中は今日の夕食は何にしようか、そんなことだつた。その選択肢も、駅からアパートまでの間にあるコンビニ3店舗のうちどこに寄ろうか、そして何弁当にしようかといった寂しいものだつた。あくびをしながら両腕を真上に伸ばし、内側にひねつて腕時計に目を向けると、9時50分になつていた。

目の前のスポーツ新聞を手に取り、今日何度も見てている「広瀬引退」の文字をもう一度見てから鞄の中に入れ、トイレに向かつた。

トイレから戻り、「じゃあ、帰るね」と遅番のアルバイトに言った時、エレベーターホールから優香が向かってくるのが見えた。偶然なのか、目が合つたので会釈をすると、優香も笑みと共に会釈をしながら歩いてくる。

「お疲れ様です。部長は？」

「今日はもう帰つたよ」

「ああ、そなんですか。これ出すだけなんで」

「じゃあ、机の上に置いとけばいいよ」

デスクと優香のやりとりを修平が見ていると、横から「帰らないんですか?」と遅番バイトが聞いてくる。

「いや、帰るよ。じゃあ、お先に失礼します」
デスクにも、優香にも聞こえるように言つて、席を離れる。優香も「お疲れ様です」と言つて、帰るひきする。

エレベーターホールへ向かいながら、修平は「今日せめがひこれで終わり?」と優香に聞いてみた。

「ええ、もう帰ります。高木さんも今日は一〇時までなんですか?」「うん」

エレベーターの「」ボタンを押してから、随分たつているような気がするのになかなかドアが開かない。6台もあれば、そのうちのどれかがすぐ来そうなものなのだが、開く気配がない。修平が口を開く。

「ねえ、じ飯食べた?」

「いえ、まだですけど」

「一緒に食べない?」

「あ、はい」

短い言葉の中にも、お互にこの前の出来事が脳裏にあったので、慎重さが感じられた。

料理を注文し、最近の仕事のこと話をした後、優香が聞いてきた。

「この前のこと、覚えてますよね?」

「この前? ドームの近くで飲んだ時?」

「ええ」

「覚えてるよ。うん、覚えてるけど……」

優香は意識してそうしているような笑顔で話を続けた。

「なんか、私酔つてたとはいえ、余計なことしゃべっちゃつたな、つて。なんか「めんなさいね」

笑顔から、ちょっと眉間にしわを寄せ、困ったような表情になっていた。

修平はその優香の表情のわずかな変化を感じながら応じた。

「いや、別に謝ることじゃないでしょ。いいよ。まあ、そういうこと話してくれるのはちょっと嬉しかつたり。それと、僕、口は堅いんで。そんなペラペラしゃべったりする方じゃないから」

「うん」「

優香は首を縦に振つて笑つた。今度は自然に出た笑顔だった。

「あのや、今度甲子園に行こうかと思つて」

修平は今朝決めたことを優香に話した。

「広瀬がさ、7月30日に甲子園で先発するんだって。ひょっとして、ひょっとしてだけど最後になるかもしれないんだってさ」

「最後？」

「駄目だつたら引退するんだってさ。だから見に行つてこようかと思つて。デーゲームだから日帰りできるし」

鞄の中からスポーツ新聞を取り出し、優香に見せた。しばりくわれを見詰めていた優香が顔を上げた。

「ショックなんだ？」

「そんなことないけど。でも好きだつたからね、ずっと」

「高木さんの顔、寂しそうですよ、なんか」

冗談めかして言つ優香に、「そう?」と照れ笑いをしながら、心中を見透かされているような気がした。広瀬の件だけではなく、優香への思いから何から全てを。

「誰と行くんですか?」

新聞を几帳面に4つに折つて返しながら聞いてきた優香に、「一人で行くつもりだけど」と修平は答えた。

「ふうん」「

それだけ言つた優香は何か考えているようだつた。湯飲みの中に残つたお茶は、冷房が効いているせいですっかり冷たくなつていた。

駅の改札口を通り、それぞれ逆方向のホームに降りるため別れようとした時、

「ねえ、私も行つていい？」

優香が修平の背中に言った。

修平は振り返つて、優香の瞳を見た。

「甲子園。よかつたら一緒に行つてもいいですか？」

「え、いいけど。いいけどいいの？」

「なんで高木さんが聞くんですか」

笑いながら優香が修平の一の腕の辺りを人差し指と中指でつついた。

「じゃあ、行こうよ。甲子園。一緒に行こう」

「30日ですよね」

「うん、30日」

7月30日、甲子園球場。運命の時、運命の場所。修平と優香は一緒に向かうこととした。

約束（後書き）

小説評価、コメントを残していただけると嬉しいです。

7月30日午前7時半、東京駅。新幹線中央乗換口は、日曜日と
いうことで家族連れの姿が目立っていた。修平は丸く大きな柱に寄
り掛かって、行き交う人々を眺めていた。待ち合わせの時間までは、
まだ30分ある。日ごろ、友人との待ち合わせの時には相手が先に
来ていることが多い。相手を待たせることよりも自分が待
たされてしまうことを考えてしまい、ついつい待ち合わせぎりぎり
の時間になつたり、時にはその時間を過ぎてしまうのだ。それが今
日は30分以上も前に着いている。ただ、この待っている時間は悪
いものではなかつた。

隣の柱に立つていた修平と同年代の男性の元に、一人の女性が駆
け寄る。顔の前で手を合わせる彼女の頭を彼は軽く叩いて、二人で
改札口の方に向かつて行つた。二人の一連の動作にちょっと憧れの
ような感情を抱いてから、また正面を見ると、視線の先にこちらに
向かつて歩いてくる優香の姿があつた。修平は柱から背中を離し、
右肩のバッグを左手でしっかりと掛け直した。

「おはよう」

修平が声を掛けると優香は、

「おはようございます。すみません。待ちました？」

「いや、今来たとこ。ていうかまだ8時まで30分近くあるし」

8時に待ち合わせたにも関わらず、7時半すぎに既に出来つてしまつた。

「じゃあもう中、入っちゃおつつか

「ああ、そうですね」

改札口に向かつて歩きながら、修平はさつきのカップルを思い出
していた。もし優香が遅れてきたとして、まだ頭を小突いたりなん
かできないな、と。

乗る列車は8時13分発の「のぞみ11号」だった。ホームにはまだ入ってきていなかった。

「何か食べるの、買つとく?」

「うん、ちょっと買つとこ」うかが。高木さんは朝ごはん食べてきたんですか?」

「いや、何も食べてないけど。ていうかいつも朝、食べないし」

「へえー。駄目ですよ。朝食はちゃんと取らないと」

「じゃあ、今日は食べようつかな」

ホームにある売店でサンドイッチとペットボトルを買つて、二人が乗る6号車の停車位置まで来てもまだ時間があつた。空は雨ごとに降つていないので、太陽はなかなか顔を出せないでいた。

「甲子園、晴れてるかな?」

雲の切れ間からこぼれるかすかな光を見上げながら、優香が呟く。

「うん、晴れの予報になつてたけど。34度だつてさ」

「暑くなるんだね。あの日と同じだ」

今日初めて優香が切なそうな表情を見せた。その横顔にどう応えるのがいいのだろうか、考えていると「のぞみ11号」の入線のアナウンスが流れた。

「あつ、来るんだ」

優香の横顔は、修平が何か言つ前に元の笑顔に戻つていた。

二人は6号車7番D、E席に並んで座つた。次々に乗客が乗り込んできて、切符を見ては指定された座席に座つっていく。

今日も新幹線をご利用くださいましてありがとうございます。

この電車は「のぞみ11号」博多行です。：

8時13分、東京駅から西へと動き出したのぞみ11号の車内にはアナウンスの声が響いていた。修平はリクライニングを倒しながら、窓の外を眺めている優香の視線の向こうを探していた。

*

「ねえ、富士山。今日はきれいに見えますね」

「あつ、本当だ。なんか新幹線乗ると、いつも天気悪くてきれいに見えないんだけど」

「そうなの？ 今日野球、中止になんないかな？」

「今日は大丈夫だよ」

顔を見合させて笑つてから、窓の向こうの富士山をしばらく見詰めていた。

富士山から視線を外さずに、優香が話を切り出した。

「事故のね」

「うん」

「事故の後、家にマスコミの人、いっぱい来たんですよ。あつ、うちの社の記者も当然来てたんだろうけど。父を亡くして、で、5歳の私は奇跡的に助かって。そういうのってやつぱり記事にしたいんですね。新聞とか雑誌は。母はそうやって押し掛けてくる人たちに丁寧に対応してて、答え得る限りのことは話してたと思います。親戚の人の中には怒つて追い返しちゃう人とかもいたんですけどね。私も子供ながらに、来る人たちに良い印象は持つてなかつたんですよ」

「それはそうだよね。やつぱりそういう時、辛い時に来られると、怒りたくもなると思うよ」

「でもね、一人優しいお姉さんがいたんですよ。私のことを本当に気に掛けてくれてるっていうか、取材対象の一人に過ぎない私のことを親身に考えててくれる……。少なくとも私はそう感じたんです。それで、その人が書いた記事を持ってくれたんだけどね……」

そう言つと、優香はバッグの中から小さな新聞記事のコピーを取り出して、修平に手渡した。

「この記事、その人が書いたんだって」

それは、1988年の甲子園決勝、そして列車事故があつた日から数日後の記事だった。甲子園で優勝し、時の人となつていた広瀬

選手についての記事。その中で広瀬のコメントもいくつか紹介されていた。

「優勝を決めた日の列車事故で、亡くなつた方の中には甲子園からの帰りだつた方も多く含まれていたと聞きました。その家族の方が、甲子園を、野球を見るたびに、事故のことを思い出してしまいます。はないかと。でも、できれば：野球を嫌いになつてほしくないです。だからつていふわけじゃないんですけど、僕はプロに行って野球をもつともつと一生懸命やりたいと思つています」

修平が記事を読む間、優香は富士山を過ぎてしまつた窓の外を見ていた。修平は「そうなんだ」とだけ言って、コピーを優香に返した。

「この人、まだ新聞記者をしてるのかなあ。いつか、会つてお礼を言いたい」

「このことがあつたから江添さんは記者を目指したんだ？」

「うん、新聞記者になりたつて強く思つたの。でも、この事故がなくともなりたかつたかもしれないんですけどね。子供の頃から文章を書くのが好きだつたから」

そう言つて微笑む優香に修平は言つた。

「今日、しつかりと見届けなきやね」

甲子園までの距離は急速に縮まつていつた。

大阪

10時49分、定刻に新大阪駅の21番線ホームに到着した「のぞみ11号」から降りると、強い日差しが一人を照り付けた。冷房の効いた快適な車内からの落差に、思わず顔を見合わせて苦笑する。太陽はまだ昇り続けている。窓ガラスを隔てた快適な空間はゆっくりと一人から遠ざかる。雲一つない青空は容赦なく熱風を浴びせながらも、恨めしそうに見上げる一人を優しく微笑みながら見守つているようだった。

試合開始まではまだ3時間ある。昼食を取るには早過ぎる時間であるのと、「大阪の食べ物『たこ焼き』というのが修平と優香で一致したので、たこ焼きを食べに行くことにした。

「どこに行けばいいんだろう?」

駅の構内を右に左に見渡しながら修平が尋ねるが、優香も大阪についてよく知らない。

「あー、分かんないね。グリコの看板がある辺り、行けばいいんじゃない」

「何だ、それ。道頓堀だけ。行つてみようか」

「うん、行つてみよ」

道頓堀に着くと、両手を上に挙げながら走るランナーが一人を迎えた。

「あつ、あれあれ。結構大きいんだね」
やや興奮気味の優香に、修平が呟く。

「ただの看板じゃん」

「えー、そういうこと言わないでよ」

その後、足が動いているかに見て、くいだおれ人形を携帯で撮影しながら、歩いて回った。

「どこが美味しいんだろうな」

「やつぱり人が並んでるところじゃないのかな」

「でもあんまり時間もないしな。適当に入っちゃおつか」

「うん、そうだね」

長蛇の列が続いているわけでもなく、かといって閑散としているわけでもない一店を選んで入った。

「熱っ」

「こんな暑い日でも、大阪の人はたこ焼き食べるんだね」「ほつふつはつへ」

「え？」

「そうだね。でも僕は冬でもアイスコーヒー飲むけどね」「でもコーンポタージュが好きなんでしょう」

「あつ、覚えてたんだ。あつたね、そういうこと。あの日がなかつたらさ、今日一緒に甲子園来てなかつただろうね」

「そうだよね。あの日、私がしゃべっちゃつたんだよねえ」

「そろそろ行こうか。甲子園」

修平がコップに残っていた氷を口に含むと、一人は席を立つた。店内にはタイガースのユニホームを着た三人組がたこ焼きをほおばつていた。

*

試合開始まあと一時間になろうとしていた時、一人は甲子園球場の中に入った。相変わらず空は真っ青で、太陽は衰えを知らなかつた。3塁側のオレンジシートに着席した時には、既に額から汗が滴り落ちていた。

一人で、土と芝生のグラウンドを眺め、外野席で盛り上がる応援団を観察し、左手にグローブをはめ右手にはジュースを持って走り回る子供を目で追い、それから、慣れない場所に来て周囲を興味深そうに見渡す優香を修平が微笑ましく見ていると、先発投手の発表

があった。

ジャイアンツのピッチャーは広瀬。予想通り、広瀬だった。

「ここまで来て、違う人だつたら笑うけどね」

そう言う修平の表情には、安堵と緊張が入り混じっていた。

「いよいよだね。たこ焼き、食べに来た訳じゃないもんね」

優香も笑いながら、18年前を思い出していた。

田曜日ということもあるのだろう。試合が始まる時にはスタンドはぎつしりと埋まっていた。タイガースの9人がそれぞれのポジションに就く。そして、運命の一戦が幕を開ける。1回表、ジャイアンツの攻撃は三者凡退。あつという間に終わってしまった。ツーアウトになつて、ベンチ前でキャッチボールを始めた広瀬は、数球投げただけでマウンドに向かうこととなつた。スタンドからはその表情を窺いることはできない。が、修平はゆっくりと歩を進める広瀬を凝視していた。いつもとは違う緊張感をまとつているようにも見えたし、いつもと変わらない姿にも見えた。

ラストピッチング

初球。ストレート。ストライク。136km/hの平凡なスピード。

2球目。初球よりもさらに遅い100km/hそこそこのカーブが決まる。アンパイアの右手はまたも上がった。ツーナッシュング。あつという間に追い込まれたタイガースのトップバッター、佐野はバッターボックスをいつたん外して一呼吸置く。そして、3球目。ストレート。外角低めいっぽいに決まる。三球三振。

周りの観客から拍手が沸き起こつた。それに合わせて優香も手を叩いた。笑顔で、修平の方に顔を向ける。修平の笑顔を予感してが、修平は顔色一つ変えずに腕を組んだまま、一つ吐息をついただけだつた。ん？ 優香が修平の顔を覗き込む。それに気付いた修平は、なんとか口の周りの筋肉を動かして、笑みを返した。組んでいた腕を解いて手を叩く。既に鳴り止んでいた周囲の拍手から遅れて。後続の打者もあっさりと打ち取つた広瀬はゆっくりとベンチへ向かつて歩いた。張り詰めていたスタンンドの緊張感が和らぐ。

「なかなか良い出足だよ」

「ランナー出ないね、どっちも。やっぱり点入った方が面白いんじゃないの」

「今日は両投手とも調子良さそうだから、あんまり点入らないかもよ」

「そつかあ」

修平の予想は、もうくも崩れた。2回、3回と得点したジャイアソソジが7対0と大きくリード。ジャイアソソジのリードは嬉しいのだが、自信を持つて言つた「点が入らない」という言葉を取り消したかった。

6回を終了しても、点差はそのままだった。

「勝てそうだね。これで広瀬の引退も先延ばしかなあ」

優香は楽しそうに、一段と弾んだ声とともに修平を見て、またグラウンドに視線を移す。修平も予想外の広瀬の好投に驚きつつも、胸の鼓動を抑え切れないでいた。甲子園はざわめき、異様な雰囲気になつてきている。

それは。タイガースの安打数ゼロ、四死球やエラーでの出塁もない。完全試合まであと3イニング。広瀬の完全試合を期待するジャイアンツ・ファンとなんとか阻止してほしいと願うタイガース・ファン。真夏の太陽の光を一杯に浴びた甲子園球場は、あの日を思い起こさせた。そう、あの日を。

7回表、ジャイアンツの攻撃が始まると、ライト側、一塁側を中心にはスタンドがカラフルに染まり始めていた。

「わあ、綺麗だね。これつていつせいに飛ばすんだよね。ちょっと怖いかも」

「なんかさ、あれみたいだよね。甘いお菓子。なんて言つんだけ初めで見るジェット風船の光景を素直に喜んでいる優香に、修平も試合の緊迫感をほんの少しだけ横に置いて、応じる。

小学4年生の夏休みだつただろうか。汗ばむ陽気の昼下がり、偶然会つた好きな女の子と公園の片隅に座つて食べたのがゼリービーンズだつた。何色がいい？　うーん、赤。赤は駄目。黄色ね。あの頃の僕は何を考え、何をしていたのだろうか。子供なりに悩みごとも嫌なこともあつたかもしれないけれど、女の子がくれたゼリービーンズは甘くて美味しくて、カブトムシを見つけた時は興奮して、ケイドロで牢屋に入つた仲間を何人も助け出した時は有頂天になつていた気がする。その時、遠く離れた場所でまだ見ぬ彼女は、とてもなく大きなものを背負わされたのだ。まだそれは背中にのしかかっているのだろうか。

「それってゼリービーンズでしょ」

優香が笑つて、答えた。

うつかり手を離してしまつたのだろう。一つのジェット風船が日

が傾き始めた空に舞い上がりしていく中、タイガースの選手がベンチに引き揚げていった。反対側のベンチからは広瀬がゆっくりとマウンドに向かっていった。

六甲おろしの大合唱が終わると同時に、無数のジョット風船が青から赤へと変色し始めていた空にさまざまな色を付けていく。その絶景は、沸きあがるスタンドをよそに、修平と優香には物寂しさを感じさせた。

タイガース、ラッキーセブンの攻撃。広瀬がこの回最初に投げたボールは見事に打ち返された。風船から再び黄色いメガホンを持ち替えた観客は歓声を上げ、オレンジ色のタオルを持っていた者は顔をしかめた。修平は天を仰ぎ、優香はその横顔を見詰めた。広瀬は打球の行方を追わずしてそのままマウンドの土を眺めていた。しかし次の瞬間、顔をしかめたのは黄色い集団で、オレンジ色の一角から歓声が上がった。センター前に落ちると思われた打球は縁の芝生に触れる前にセンター木本のグラブに吸い込まれていた。右手で左肘をさすり、苦痛の表情を浮かべながらもグラブを掲げる木本の姿を確認して、一塁墨審がアウトを宣告した。まだ、可能性は続いていた。

続く打者の当たりは、うつて変わつてボテボテで、完全に勢いを失くして転がつていった。間に合つか。全ての目が一塁墨審に注がれる。一瞬の間があつた後、拳を握った墨審の右手が上がつた。

が、限界だった。

次に広瀬が投げた渾身のストレートはいとも簡単に打ち返され、そのボールはまさに弾丸のように飛んでいき、縁の芝生を刈るように鋭く落ちた。修平は今度は俯き、優香はやはりその横顔を見詰めた。

この時点で終わったのかもしれない。広瀬の投げるボールはことごとく弾き返された。完封がなくなつた。もう止まらなかつた。我慢に我慢を重ねて見守っていたジャイアンツの監督がベンチから出

てきた時には、ジャイアンツは追いかける立場に追いやられていた。7対8、タイガースのリード。帽子のつばを下げ、足早に広瀬はベンチに向かった。最後のマウンドから降りた瞬間だった。修平の額から流れる汗に目尻から流れたものが合流した。優香の人差し指がそれをそっと拭った時、秋を感じさせるような風が甲子園を流れた。

今日一日、修平と優香を散々照らし続けていた太陽が少しずつ沈んでいき、六甲山に近づいていた。球場から次から次へと観客が吐き出されていく。駅へと向かう人の波に、二人はのみこまれていた。前を歩く人が少しでもスピードを落とすと、後ろからの圧力を背中に感じる。小柄な優香は、数メートルほど離れただけで、修平の視界から消えてしまいそうだった。たとえはぐれたとしても、携帯電話で連絡を取り合えば済むことだが、修平は今、絶対に優香を離してはいけないという思いに駆られた。その理由は、自分でよく分かっているような気もしたし、全く分かっていないような気もした。修平は、優香の左手をつかもうと右手を伸ばした。右の人差し指が左の手の平に触れた時、二人の間に子供が割り込んできたため、再び引き離された。少しずつ周囲の空間が広くなつていき、修平が優香を見失う可能性はなくなり、目的の駅に到着してしまった。これから二人は新大阪へ向かう。あの日、あの時、優香が父に連れられて、向かつたように。

プラットホームはタイガースのユニホームを着た若者や、オレンジのメガホンを振り回して母親にたしなめられている子供ら、甲子園からの帰路を急ぐ人達でいっぱいだった。一人の前に並んでいた小さな女の子が、手に持った棒付きの飴を舐めながら優香に微笑んだ。優香は彼女に微笑み返してから、その子を見詰めたまま、呟いた。

「私もある子みたいだったのかな」

「えっ？ うん」

夢中になつて飴を舐めている女の子を見ているのか、それとも事故のことを思い出しているのか、優香の視線は低く下がつていた。

「もう18年になるんだよね。18年。もう忘れてもいいよね。忘れた方がいいよね。忘れないといけないよね」

「そう簡単には忘れられない」

「うん。あの日の私はこの子みたいに父と手を繋いで、楽しそうにここで電車を待っていたんだと思うの。父と過ごす時間が後数分だなんて夢にも思わないで…」

車内に乗り込んだ二人は、反対側のドアまで押し込められた。車内いっぱいに野球ファンを詰め込んだ電車は、普段と変わらぬ様子で動きだす。窓の外を直視していた優香は、修平の方に顔を向けた。それに気付いた修平が優香の目を見る。

「もうすぐなの。事故現場」

「うん」

それだけ会話を交わすと、優香も修平も再び外の景色に向き直った。いよいよ事故現場を通過しようとしたその時、優香は静かに目を閉じた。修平は右手でそっと優香の左手を握った。

カン、カン、カン…。

踏切の音が近づいていき、その音はすぐに遠く離れていった。何事もなく、電車は18年前の事故現場を通り過ぎた。そつと開いた優香の目から涙がこぼれ落ちた。その涙を修平は手を繋いでいない、もう一方の手を伸ばして、人差し指で拭つた。

「これでおあいこだね」

優香が笑顔を見せた。

「おあいこ？」

「さっきは私が涙を拭つてあげた」

「あれは汗だよ」

「汗なの？」

「汗だね」

「汗かなあ」

顔を見合させて、笑つた。

「私はもう大丈夫だよ」

さつきの女の子が一人を不思議そうに見上げていた。

*

修平の左に座っている優香は、リクライニングを倒したシートで眠ってしまったようだ。修平は、外の暗闇に映る彼女の横顔を見詰めていた。時々、外の灯りで見えなくなってしまう彼女の顔は、とても穏やかだった。窓の外の彼女から隣に座っている彼女に視線を移した。

修平も優香も少しずつ甲子園から遠ざかり、東京へと近づいていた。

修平が、優香と初めて出会った日のことを思い出していると、優香がゆっくりと目を開けた。

「寝ちゃった」

「別にいいけど。疲れた？」

「うん」

「寝てていいよ。東京に着くころになつたら起きてあげるから」

「うん。そうする」

優香は再び眠りにつこうとした。

「ありがとうね」

目をつぶつたまま優香が言つ。

「うん」

その顔を見ながら、修平は応えた。今の「ありがとう」「起きる」とじゃないよな。今日一日全部のことだよな。

今日で彼女は過去を吹っ切ることができたのだろうか。明日から笑って生きていいくことができるのだろうか。もし、そうだとしたら、今日の僕は少しでも明日からの彼女のためになつたのだろうか。10年後の彼女、20年後の彼女、50年後の彼女は今日の僕を覚えているのだろうか。忘れられてしまうかな。でも、10年後の彼女、20年後の彼女、50年後の彼女が笑つて過ごせるのなら、そのた

めに今日の僕が少しでも役に立てたのなら、それはそれで嬉しいことだと思う。だけれど、10年後も20年後も50年後も、今みたいに彼女の隣にいたいとも思う。そのためには、僕はもっとと頑張らないといけないと思う。成長しなければいけないと思う。

僕は江添優香さんが好きだよ。

僕は君のことが大好きだよ。

*

左肩を叩かれているのを感じて、目を開けた。視界には彼女の顔が飛び込んできた。

「もうすぐ着きますよ

「え？」

暗闇だったはずの窓の外は随分と明るくなっていた。静寂に包まれていた車内は、降りる準備を始めた乗客でざわついていた。

「起こしてくれるんじゃなかつたの」

優香がとびつきりの笑顔で言った。

僕にはまだまだ努力が必要だった。（了）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6466a/>

ボールパーク

2010年10月8日15時29分発行